

ワクチン接種について

人に初めて使う遺伝子ワクチン

新型コロナウイルスのワクチン接種を、企業や大学で産業医らが行う「職域接種」の対象について、国は「従業員千人以上の大企業でスタートしたい。」と表明しました。この「職域接種」では米モデルナ社製のワクチンを使う予定としています。

通常ワクチンは開発に5年〜10年もかかります。今回のワクチンは世界的な新型コロナウイルスの流行により、急遽1年足らずで開発されたmRNAワクチンと言われる全く新しい未知の遺伝子ワクチンで、人に使われるのは今回が初めてです。そのため10年後、20年後といった長期的な安全性についてはまったくわかりません。

接種後の副反応については重篤化や死亡事例も報告されています。治験の段階で感染を防ぐ有効率が95%という結果がでていますが、これは偽物のワクチンを打った1万人のうち100人がコロナウイルスに感染したのに対し、本物のワクチンを1万人に打ったら感染者が5人だったという意味です。そこにはワクチンを打たなくても9900人が感染していないという事実があります。また、変異株に対する有効性も考慮する必要がありますが、必要があるでしょう。

接種はあくまで自己判断で

上記のように、今回のワクチンには不明な点もあり、接種に際しては個人の自由意思が担保されなければいけません。しかし「職域接種」となった場合に、「あいつはワクチンを打っていない」といった差別や、「うちの職場は接種率が高い」といった全数把握の弊害、「周りが接種しているから」といった同調圧力の発生が懸念されます。強制強要が発生しない、また個人の判断が尊重されるような徹底した体制での職域接種実施が会社には求められます。

特に若い世代はコロナウイルスによる重篤化、死亡のリスクは低い（左図）、よく検討してワクチンを接種するかしないかの判断をしましょう。



接種に際して職場で困った場合は国労に相談してください。



出典：東洋経済オンライン「新型コロナウイルス 国内感染の状況」



第148号

2021年6月7日

発 責 国労九州本部
住 所 博多区博多駅東3丁目9
番3号ニコウハイツ1003号